



甲木 京子さん
KATSUKI Kyoko

日本人が
見つけた

ミャンマーは周辺国との経済格差が大きく、多くの人が出稼ぎに行っています。そこで問題となっているのが人身取引です。“ここで働けば借金を返せる”などと言葉巧みに誘われ、強制労働をさせられてしまうことも。そんな人々の社会復帰を目指し、ミャンマー警察や社会福祉局の職員などが適切に対応できるようお手伝いをしています。

赴任する前は、ミャンマーの人は穏やかで、おとなしいイメージ。でも、いざ接してみると、そこには意外な素顔が一。人身取引の被害者とカウンセラーを体験するロールプレイ

どんな時も全力投球!みんなの前で堂々と発表

をすると、台本がないにもかかわらず、被害の状況や家族との複雑な関係、心情まで、実にリアルに演じてくれます。実際に教えるトレーニングでは、普段物静かでシャイな感じの人までが、突然自信に満ちたベテラン講師に大変身。ディスカッションや発表にもみんな積極的で、教室はいつも熱気にあふれています。実は意外と“はじけた”キャラクターだと思いますよ。



小川さんの合図で阿波踊りを披露。すごい観察力でリズムはばっちり

ミャンマーには、ろう学校がヤンゴンとマンダレーに1校ずつしかありません。しかも初等教育だけなので、それ以降の教育現場には手話ができる先生もいない。就職もなかなかできません。私はろう者をもっと社会参加できるよう、手話通訳者の育成を支援しています。

ミャンマーのろう者は、なんと言っても“お目が高い”。洞察力があって鋭いのです。「オガワ、昨日は飲み過ぎたでしょ?」「ちょっと太った?」なんて、手話でずばっと言ってくるのでドキッとします。

伝統衣装のロンジーを数枚で着まわしていた時なんて、「あなたはいつも同じロンジーだね」と、“ダメ出し”されてしまいました。それもそのはず、暑いお国柄ですから何十着も持っている人もいるぐらいで、一日何度も着替えるのが当たり前なんです。今ではミャンマー人に負けないくらい、いろいろな色・柄を取りそろえておしゃれを楽しんでいます。



小川 美都子さん
OGAWA Misako

特集 ミャンマー
変わる国、動く人々

ミャンマーのここが おもしろい!

ミャンマーで暮らし、現地の人々と接する日々。日本人にとっては、目にすること、聞くことすべてが“発見”だ。JICA専門家たちが見つけた“おもしろポイント”はこちら!

○ 〇 運送、△△ 造園…。ヤンゴンでは日本語がそのまま付いた中古車を多く見かけます。かつて、日本の地方都市を走っていたようなバスを目にすると、とても懐かしい気持ちになります。ヤンゴンは急速に経済が発展し、交通量も爆発的に増えています。交通網の整備が追いついていない。日本の常識からは、「ええっ!?!」と思うことが盛りだくさんです。

例えば、市内近郊を1周する鉄道は時速15キロ。線路がガタガタで、スピードを出すと脱線してしまうからで

ヤンゴン近郊の環状線。約45キロを走るのに3時間かかる



ず。売り子さんが歩いて車両に乗り込み、また下りて次の車両に移れるほど。郊外の農家の人々が野菜を売りに出歩くための行商列車となっていますが、今後は通勤・通学の足として多くの人にとって便利な交通手段になることを目指していきます。

バスやタクシーに乗って驚いたのは、仏像や僧侶の写真を運転席に貼っていること。そしてパゴダの前を通ると、車内からでも手を合わせる乗客を目にします。ジーンズをはいた今時の若者でもそうなので、実にミャンマーらしいなあと思います。



朝は乗客と野菜で車内がぎゅうぎゅうに



三宅 光一さん
MIYAKE Koichi



市原 裕之さん
ICHIHARA Nobuyuki

2008年に発生したサイクロン「ナルギス」で、国内では約14万人が犠牲になりました。これを機にミャンマーは防災に力を入れるようになり、私は社会福祉救済・復興省で防災能力の向上を支援しています。

日々の業務を通じて驚かされるのは、人々の信仰心の強さです。敬けんな仏教徒が多く、年一回、各省庁にお坊さんを招いて話を聞くイベントがあります。その時にはスタッフ全員で寄付をし、托鉢に使う銀の鉢だったり、けさ、傘など、お坊さんが使う実用



寺に寄付する物を飾り付けてなぜかライトアップ

的なものを部署ごとにおみこしのように飾り付け、会場で披露するのです。どんなものを寄付すればいいかと同僚に聞くと、「何はともあれマネー」との答え。寄付したお札は糸でぶらさげたり、何枚もきれいに折り重ねて花のように飾りつけられていました。もちろん誰も盗んだりしません! 生活に仏教が根付いているんだなあと感じる出来事でした。



省庁の一室に職員が集まって説法を聞く